
漂流者はハイブリッドな現役将校

金貨の騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漂流者はハイブリッドな現役将校

【Zコード】

Z0721X

【作者名】

金貨の騎士

【あらすじ】

地球、海鳴市にやって来た次元漂流者は魔法と質量兵器の両方を使用する軍人だった・・・。作者はこれが初挑戦な初投稿です。どうかよろしくおねがいします。

プロローグ（前書き）

はじめまして、金貨の騎士です。よろしくお願ひします。

プロローグ

緊急報告

第374特別調査地区の探査中、突発的次元崩壊が発生。崩壊そのものは元々危惧されていたため特に問題は無く、調査地区的全技術データも回収に成功。

しかし、

その次元崩壊に1名、この部隊の指揮をとっていた『フィーア・レイガード』が巻き込まれ、行方不明となつた。

彼の損失は第374地区の全技術データ消滅以上の痛手になるため、目下捜索中である。

ベルフィーア連邦政府軍第七師団・大隊副隊長リオル・ヴェルシア
中佐・記

第一話（大修正）（前書き）

これら参りて本編に。

第一話（大修正）

第97管理外世界・地球・海鳴市・18・28

? ? ? side

・・・えーと、とりあえず落ち着け俺、冷静になれ俺。ゆっくりでいいから自分の事を思い出せ俺。

名前はフィーア・レイガード、二十歳、職業軍人、独身。よし、完璧。とりあえず・・・

むくり

起きよう。しかし全身ズキズキするが特に・・・

「・・・頭痛ええ・・・。酒でも飲んだっけ？」

そうだ、さつきまでみんなで居酒屋にでも行ってそのまま路上で眠つてしまつたんだ。そうに違いない。

断じて亜空間での任務中に事故つて時空をジャンプしたわけ・・・

『フィーア・・・あなたが参加した飲み会は2年前が最後ですよ?』

「なんか俺が寂しい奴みたいな言い方だけど、仕事が忙しかつただけだからな！？そしておはようー！リリアー！」

フィーラは左腕に着けている腕時計のようなサポートAI兼通信機のリリアに返事を返した。

「・・・リリア、いつたい何が起きたんだ？」

『あなたがだいたい覚えてる通りだと思いますが？』

「構わない、状況を報告せよ。」

幾分口調をまじめにし、そう言った途端にリリアの口調もそれに応じるがごとく変化した。

『報告。民歴56年5月。我々第七師団の大隊は大隊長の指揮のもと突如亜空間に出現した第374特別調査地区の探査及び技術データの回収の任務を遂行。しかしその終盤で危惧されていた時空崩壊が発生、部下の退避を優先した指揮官1名が脱出に失敗、現在行方不明扱いとなつております。』

「その行方不明者つてのは当然・・・」

『あなたのことです。』

あちやあ～と額を抑えながらフィーアは呻いた。そういうや新兵が時空崩壊から逃げ遅れていてそいつ助けてたら自分は間に合わなかたんだつけな・・・

「一応確認するが俺の頑張りは報われたのかい？」

特にその新兵と自分の副官であり親友のリオルが気になる・・・

『死人0、行方不明者もあなただけ、というのが今の私の最後の記録です。』

「お前が言つならそうなんだろ・・・まあ少し気が楽になつたよ。」

さて、これからどうしようか。通信機兼サポートAIのリリアに軍から通信が無いところを考えると、エライ遠くに跳ばされたんだろうな・・・。このリリアは銀河一個分離れた場所からリアルタイムで通信できる程高性能なのだ。そのリリアに通信が一個も無いということはここがリリアが圏外になるほど遠い場所にいるか、軍に捨てられたかの一托しかないのだ。後者にいたっては自分は即行でクビになるほど上官にも部下にも嫌われてないので無い筈。ついでか後者だったら泣く・・・。

「まあ、向にせよ」*「」*がどんな世界だか調べるのが先決かな？」

『やうですね、この世界の生活水準もさほど低く無むうなうのでサバイバルする』とも無いでしょ。つからまざはこの世界の知識を集めましょ。』

「よーしー。やうと決まれば早そつて『警戒！－9時方向！－』……え？」

あー、俺そういえば路上にいたんだつた。周り見りやリリアの言つ通り割と文明高やうじやん、てことは自分の世界にもあつた車輪が4つ付いたアレ……

ドキヤアー！！

・・・いつまでもこいたら自動車が通るに決まつているじやん……もつとも、この程度”で俺は死なないのだが……。

キリモミ状態で空中を舞うをなか、フイーアは視界の端になんとも言えない表情でこちらを眺めている金髪の少女と犬耳の女が見えた気がしたがハツキリ確認する前にこの世界に来た時同様“また”顔面から地面に落ち、視界がブラックアウトするのだった。

『・・・先が思いやられます。』

第一話（大修正）（後書き）

「」感想、「」指摘お待ちしております。

プロフィール（前書き）

オリ主フィーラの紹介

プロフィール

名前	フィーラ・レイガード
年齢	満二十歳
性別	男
職業	軍人（階級については黙秘）
容姿	赤みのある茶髪で瞳は紺色。 顔はよく優男呼ばわりされる程度に整っている。 やや長身長足。
服装	故郷の軍隊の軍服と士官帽を装着。旧日本軍の軍服に似ている。 全体的に黒色で、控え目に金色の装飾とボタンが付いている。 フィーラの軍服はカスタムされており上着の裾が膝まで伸びている。
性格	基本お人好しだが、悪知恵がよく働くため抜け目がない。
戦術	剣と銃と魔法と氣功術

第一話

フェイツフェイツside

魔導士フェイツ・テスタッロッサは困惑していた。

母親の指示のもと、ジュエルシードというロストロギアを集めるため海鳴市を一通り探索し、ひとまず今日は切り上げ、自宅兼拠点にしているマンションへの帰り道の途中に倒れている男を見つけてしまったのである。その男がただの人間なら別に対処に困ることもなかつたのだが、

『マスター、あの男から魔力反応があります。』

自らの愛機バルティックシユのこの一言によつぱりるべきか悩むハメになつたのである。

(この管理外世界に魔法文化は無かつた筈・・・といふことは、あの人は時空管理局員か次元漂流者のどちらか・・・)

今、自分たちが管理局と接触するのは非常にまずい。しかしこのまま放置した場合、後々敵として脅威になるかもしれない。何より漂流者だった場合、彼女の性格上ほつとくこともできなかつた。

「の葛藤としばりく戦い続ける」と数分、

「 ハイド、ハイドったらーー！」

「うーー、『めんアルフ』どうしたの？」

使い魔のアルフが声をかけてきた・・・といつかさつきから呼んでいたらしい。集中しすぎて聞こえなかつたようである。

「アイツ曰が覚めたみたいだよ。」

そう言われアルフの指さした方を見ると確かに男はむくじと起き上つていた。改めてよく見てみると、その姿は全身黒色で物々しく、腰には日本刀とレイピアが合わせつたよつな剣がぶら下げられていた。

確實にこの世界の人間じや無い。

フュイトはそう結論付け、一層警戒しつつ観察することにした。

「・・・なんか一人で喋りだしたね。（・・・変な人。）」

「いや、左腕に付いてる何かに話しかけてるみたいだよ。」

「アルフ、見えるの？」

「フェイトがバルディッシュと話してる時もあんな感じだからなんとなく・・・。」

「・・・。」

一瞬痛い人に見えたあの人と同じようなことを自分がすることを知つて少し凹んだフェイトだった。

そうやって落ち込んで顔を俯かせている間に男は何かを決心したよう立上がったのだが・・・

「・・・あつ。」

「キヤアー！」

アルフの間の抜けた声とすさまじい音が聴こえたので顔を上げて視線を向けると、男が自動車に派手に撥ねられていた。途中、目が合つてしまつたが気にする前に男は顔面から地面に落ちた。

突然のこと二人はパニックに陥つた。

「ど、どど、どうしようアルフ！？」

「落ち着くんだフェイト！え、と、こういう時は911だか117とかいう場所に電話するんだ！あれ？なんか違う気がする。。」

「私、電話なんて持つてないよーー！」

「あ、もうーーどうすりやいいんだい！？」

二人が力オスの極地に陥るその間際、それをくいとめる存在が現れた。

「痛えな畜生！いきなり過ぎんだろうが！何が『警戒九時方向』だ！！」

『気づけなかつたうえに避けなかつたことが恥ずかしいのは解りますが私に当たらぬで下さい。』

何事も無かつた（？）より元ペインしながら混乱の元凶がもう復活していた。

フェイトとアルフはもう睡然とするしかなかつたのだが、もう彼を無視できない存在であり状況であると覚悟した。なぜなら・・・

「さて、余計な会話はこゝま『図星だつたんですね？』やかましい！・・・おい、そこの一一人。

少し一緒に会話するのと口封じられるの、どっちがいい？」

元凶^{フィーラ}がこゝちに向かつてそんなことを言つてきたので一人は再び混乱しそうになつた。

第三話（前書き）

文才が欲しい・・・。グダグダ感が無くならない・・・。

第三話

フイーラside

「我ながらこれはないわ」 rzn。いきなりこんな小さい子に「お話と口封じ」の一択つて俺なに言つちゃてんだろう・・・。あゝ、金髪の子はなんか武器的出すし、犬耳は牙剥いてるよ。。。リアの言つ通り、いつも軽く“避けれる”筈のモノにまるで反応できなかつたことに動搖していたのもあるが、それを差し引いてもさつきのセリフはナイ・・・。

『大人げない、みにつちい、最低、チンピラ、外道・・・』

「それ以上言わないでくれ、トドメになる・・・えへ」と二人とも今のは本気になしでくれ。お話したいのは本音だが、危害を加える気は無い。」

『おまけにロリコンですか。』

「今のでなんでそうなるー?」

「・・・あの、すいません。先に一つ訊いていいですか?」

「おっとすまなかつた、いいぞ何だ？」

「・・・あなたは時空管理局の人ですか？」

若干緊張を含んだ口調でそう訊いてきた。今まで分かつことが四つ。

1つ。時空管理局なる組織が存在する。

2つ。彼女の口調からして、これは俺が敵か味方かを確かめる質問。

3つ。つまり時空管理局とそれに敵対する勢力がある。

4つ。彼女らはそのどちらかに所属している。

(て、とにかく。さて一番無難な返事は・・・)

「どうあえず、俺は時空管理局がなんのか知らない。」

馬鹿正直に答えることにした。どうやらその選択は正解だったようで彼女の緊張が少し解けたようだ。

フェイツ side

（最初の「口封じ」発言にはすごい焦ったけどそれほど敵意は持つてないみたいだし、何より時空管理局ではないなら大丈夫かな？）

バルディッシュを起動したままだがフェイツはそう思い、少し警戒を緩めた。

「じゃあ、あなたは次元漂流者なんですね？」

「それもなんなか知らないが別世界から流れてきたのは認める。」

それを聞いてとりあえず一安心することにした。次元漂流者なら自分達と特に敵対する理由もないはずなので戦うこともないだろう。

（でもコイツ十分胡散臭いし、怪しい奴だと思うよ・変な格好してるし・・・）

念話でアルフが話しかけてきた。確かに目の前の人とはこの世界でも自分達の世界の感覚からしても異質な格好である。軍服で堂々と剣してる人なんて尚更初めて見た。

・・・確かにもう少し素性を訊いたほうがいいかもしない。と思つた矢先、

『変質者の称号もG E T したようですね』

「もしかして八つ当たりしたこと本氣で怒つてるのか！？あと犬女、前半二つはともかく最後の一つは撤回しやがれ！？！」

「アタシは狼だ！？って、アンタ今の念話聽こえたのかい！？」

「ん？ 思念通信でなく念話つて言うのかそれ？」

『通信用電波使つてないと思つたら魔力しか使わない別物のようですが。一応通信波は拾えますが。』

いきなり会話に乱入してきた。しかも知らない言葉が出てきた。

「思念通信？」

「俺達の世界の通信手段のひとつだ。ていうかいい加減にお互い名

前ぐらい名乗らないか？」

そういえばまだお互いの名前すら知らなかつた。

「それもそうですね。私はフェイト・テスター・魔導士です。」

「フェイトー？」

まさかすんなり名乗るとは思わなかつたのでアルフは驚いた。

「多分この人は見た目ほど悪い人じゃないから大丈夫だよ。」

見た目は悪いってことかよ……とフィーラが落ち込んだのは内緒である。

「フェイトがそう言つなら……アタシはフェイトの使い魔のアルフだよ。さつきも言つたけど犬じゃなくて狼だからね？」

「それと、私のデバイスのバルティッシュです。」

《よろしくお願ひします。》

フイーア s.i.d.e

金髪の女の子がフェイトで、犬耳…じゃなくて狼耳がアルフで、武器がバルディッシュシュカ。バルディッシュシュコにもリリアと同じように自己を持つてるようだな…。うちの子に影響されなきゃいいが…。

「次は俺たちの番だな。ベルフィーア連邦政府軍、レ大隊所属フィア・レイガードだ。」

『先行試作型装着式オペレーター、N012、リリアです。』

全く聞き慣れない単語が出てきたせいかフェイトとアルフはポカンとしていた。

「…えっと、リリアはデバイスじゃないの?」

フェイトがリリアに尋ねた。

『あなたの言うデバイスとは、そのバルディッシュシュが基準と考えていますか?』

「クリと頷いて返す。

『デバイスは器はともかく原動力や構成、発生させる物のほとんどが魔法や魔力のようで、しかも武器としての役割が多いようですね。ですが私の場合、デバイスと違い魔法より機械の割合が多くで造られています。なにより私はどちらかといつとコンピューターや通信機のような役割が仕事です。』

「これ俺達の世界では普通なんだけど聞いたことない?あとベルフイーア連邦も?」

「全然」

「……」いや本格的に帰れないことを覚悟しなきゃいけないかもしない。この技術は自分の世界だけでなく全“同盟世界”での常識なのだ。これは完全に自分の知らない世界で、知らない宇宙のようだ。

「まあ、いいや。とりあえずよろしくな。」

「うん。よろしく。」

……………やつこえせ、このまことかタメ口をかれどる。

いひじて魔導士と将校の邂逅はよしやへ一段落した。

フイーラー side

自己紹介も終わり一息つき、立ち話もなんなので歩きながら話すことにした。その途中、時空管理局と次元漂流者の説明をしてもらつた。正直、時空管理局とは組織的に接触したくないし、自分の世界と接触されるとヤバイ氣がする・・・。なんて考えてたら、

「どういひだれ。あ。」

「ん？」

「フイーラの世界つてどんなとこなんだい？」

アルフが尋ねてきたきた。

軍事関係ならともかく故郷についてなら幾分喋つてもいいか・・・。

「俺の世界はな、リリアを見てだいたい分かると思つけど科学と魔法が共存してる世界なんだよ。魔法を科学で補い、科学を魔法で補う。俺達自身は“魔道科学”って呼んでるけど。おかげで周囲と比

べて随分と出鱈田な世界になつてゐるナビな・・・。」

「へえ～、なんかよく解んないけどさー」「いんだね。」

よく解んなかつたのかい・・・

「・・・そして、その出鱈田な技術を使って時空管理局のよう別世界と交流がある。」

「「えー?」」

今発言でフロイトも会話に参加してきた。さつきの管理局の説明を聞く限り、別世界、もとい別次元世界だけか?と交流する技術を有するのは管理局のあるミッドチルダといふ世界一部だけ、みたいに言ってたがここまで驚くことかね?

「そんなにすばらしいのか?」

「少なくとも私たちは管理外世界や認知外世界でそういう世界は聞いたことがないよ。」

「うへん、ますます管理局と会いたくないな・・・。」

接触したくないのになつちが興味を示すような」とのオンパレード
じゃねえか・・・。

「どうして？私たちはともかくフィーラは次元漂流者だから保護し
てもらえば・・・。」

“私たちはともかく”ってやつぱこの一人、管理局とトラブル
抱えてるのか・・・。

『そのあとがマズイのです。』

「リリア・・・？」

しばらく喋つてないからいるの忘れてたよ・・・。

『仮に保護してもうつて私達の世界、ベルフィーラ連邦に送つても
らつたとしてその後、時空管理局が連邦をほつとくとは思えないの
です。』

「さつきも言つたが俺達の世界の技術の半分は科学だ。それに比例
して軍事力も半分くらいが科学兵器・・・管理局が根絶を目指す質

量兵器つてやつなんだよ。交流のある同盟世界にいたっては、連邦のおかげで魔法の存在は知つても馴染まないで科学一筋の世界もあるくらいだ。」

もし連邦がこここの地球みたいに魔法文化がなければ管理外世界といふことで片付くのだが、生憎かなりの高水準で普及している。十中八九接触を日論むだろうがその半面、自らが否定する質量兵器も同じくらいの割合で存在している。管理局は間違いなく質量兵器、すなわち科学を捨てろと言いかねない。そして連邦がそれに従うわけもない。最悪戦争に発展しかねない。

「つーわけで何かしら考えてからじゃない限り管理局とは会いたくない。」

「アンタも大変だねえ・・・。」

ただでさえ遭難中だつてのに敵対勢力候補の存在つて、もう胃が死ぬわ・・・。

「本当にこれからどうし ん？」

『北部数キロ先に魔力反応を確認！！かなりの出力です！』

リリアの言つ通りかなり大きな魔力を感じた。これは放置したらマズイレベルだなオイ・・・。

「ツー！ フュイトー！」

「ジューエルシードだ・・・！」

二人は「レの心当たりがあるみたいだな。

「おいフェイト、これはいつたい何なんだ？」

「『めん、説明できない・・・。とにかく私達はもう行かなきゃいけない。行くよアルフ！』」

「待つてよフェイト！ えっと・・・じゃあね、フィーア。とにかく頑張りなよ！」

そう言つてフェイトは飛び去り、それを追うようにアルフも飛び立つた。魔力光の光で一人が流れ星のようだつたのは措いといて、フィーアはあまりの急展開にしばしポカンとしてしまつた。別に一人が飛んだことには驚かなかつたが、災害レベルの魔力反応の発生源に迷わず即効で向かつて行つた一人に啞然としていた。

「大丈夫か？あの二人……。」

『発生直後程の出力はありませんが現在も反応は消失していません。

』

「どうか、だつたら……。」

「行くか……。」

『あまり目立つ真似をすると管理局とやらと接触する可能性が増えるのでは？』

「『ニヒ』が連邦の未開の地で、管理外とはいえ管理局の繩張な時点で接觸は避けれないさ……それに、あんな子供をほつとくわけにもいかないだろ？』

また「イツ『ロリ』ン」とか言つてからかつてきそうだが、あんな10歳にも満たない子供が危険な場所に行つたというのに軍人の自分がそれをほつとくなんて出来るわけないし、する気もない。

『あなたらしいですね。』

意外と普通に喋つてました。

「セリヤジウム。ついでに話すとくが俺は口っこ「ンンジヤねえぞ？」

《知つてますよ。そして、あなたがお人好しなことも。》

そして、リリアは改めて言ひ。

《ついて行きましょう、ビームでも。》

フイーラは短く、だが真剣に返す。

「感謝する。」

その日、海鳴の夜空に金色と朱色の流星を追いつめ、黒い影
が空を舞つた。

第四話（後書き）

次回初戦闘描写。書けるかな…。

第五話（前書き）

本格的な戦闘は次回になつちゃいました・・・

第五話

アルフ side

アタシの御主人様のフェイトは一流の魔導士で、なにより優しい自慢の主だ。でもちょっと天然なところもあって、なんだかんだ言って年相応の女の子なんだなと思う。それはいいことなんだろうけどやっぱり・・・

「今は勘弁してほしくよおおおおおおおおおおーーー」

アルフはそう絶叫しながらその自慢の主、フェイトを抱えて爆走していた。なんでこんな状況になったか説明するため少々時間を戻す。

（十 分 程 前）

「反応があったのは、ここだね・・・。」

使用者の願望を歪めた形で叶えるといわれるロストロギア、ジュエルシード。その反応を辿つて一人は山の方までやってきた。

（あの鬼ババにフェイトが酷いことされないことを祈りながら全部終

わらせないと・・・

内心でフェイトの母親に毒づきながらも周囲に被害が出ないようついで結界を張りながらジュエルシードを探す。ところが違和感に気付いた。ふいに視線を向けるとフェイトが棒立ち状態で固まっていた。おまけに使い魔の自分は主の精神とリンクしているためフェイトの今の精神状態が分かるのだが、さっきから上の空というか何んくるというか、とにかくボケつとしていた。

「ちよっとフェイト、なにボ~つとしてんだい。」

不審に思いながらフェイトの方にアルフは歩み寄る。

「フェイトーーいつたいどうじゅーー。」

そつから先は言葉が続かなかつた。なぜならフェイトが見ているものをアルフも見たからである。

8つの目をギラつかせ、8つの足を蠢かす、“人間サイズ”になつた蜘蛛の群れがそこにいた・・・

（回想終了）

そんなわけで、今アルフは目をグルグル回しながら顔を真っ青にして氣絶したフェイトを抱えながら、ジュエルシードで巨大化した（種族的に繁栄したいとでも願つたらしい）蜘蛛の大群から全力で逃げていた・・・。

飛びかかってきた一匹を必死に避ける。長い8つの足をゴキブリのごとく高速で動かしながら、使い魔のアルフとほぼ同等のスピードで蜘蛛は追いかけてきている。今すぐのでも結界を解き、そのまま空を飛んで逃げたいが、蜘蛛が外に被害を出すかも知れないので充分フェイトはそれをよしとしないだろう…せめてなにかしら指示をくれればいいのだが当の本人はただいま絶賛失神中である。

「あ～もう少しだけ…お願いだからフェイト起きてええ…！」

「...」
「...」

「フントー」

ワイトさんがログインしました。

「あれ？ アルフおはよー。」

「寝ぼけてないでアレなんとかしておくれよ。」

「え？（巨大蜘蛛の大群を見る）・・・キュウツ・・・。（ガクツ）

L

ପ୍ରକାଶନ କମିଶନ ଅଧିକାରୀ ଏବଂ ପରିଚୟ - ୩

フェイドさんがログアウトしました。・・・。

巨大蜘蛛さんがログインしました。(ピコーン)

「来んなあああああ！」

もう駄目だと思ったその時、アルフでもフュイトでもない誰かの声
が響いた。

「伏せつ！！」

アルフは反射的（本能とも言ひ）に姿勢を低くした。その後、頭上を青白い閃光が通り過ぎ、飛びかかってきた蜘蛛に直撃した。蜘蛛はそのまま吹き飛ばされ、ジュエルシードの効力がなくなり空中で霧散した。アルフは何が起きたか分からず、とりあえず後ろを振り向く。すると、さきまで自分たちを追いかけてきた蜘蛛の群れが追跡の足を止めていた。まるでこちらを威嚇するようだ。

「まさかホントに伏せつって伏せるとは・・・。」

『結局、狼も犬科ですからね。』

「ア、アンタついてきたのかい！？」といふか封鎖結界はどうしたのさー？」

『私が解析して勝手に入口を作らせていただきました。今はちゃんと閉じてありますのでご安心を。』

「そんでアルフよ、このゲテモノ集団はなんだ？放射能でもぶちまけたのか？」

『全個体に魔力反応を確認。出力は分散して劣っていますが最初の反応物と同種のものです。ですが発生源である反応物は別の場所にいるようです』

「ややこしさから最初の反応物を『ターゲット』とする。」
「ならば『エネミー』として随時番号を追加、同時に『お前は『ターゲット』を探知した。』

『了解』

着々と話しを進めていくフイーラ達にアルフは困惑った。

「ちよっと、アンタら何する気だい！？」

「この騒動を静める。」

「ジユエルシードはホントに物騒なモノなんだよ！？」

「そんなの『レ見りや分かるわ。ついでにあのフザケタ出力でこの不安定具合……、災害どこのか下手に暴走させりや世界滅亡クラスじゃねえか……。』

『直接破壊するのは危険なので制御して強制停止させましょ。』

フィーラ達はアルフとフロイトがやるつとした『ジュークルシード封印』とほとんど同じことをするつもりらしい。しかもこの二人（一人と一機）、よく考えると自分の張った結界にすんなり侵入してきたのだ。魔法の腕もそれなりなのかもしない。なにより、あの蜘蛛の大群にはもう精神的にも本能的にも戦う気力が湧かなかつた。フェイドにいたつては、まだ意識すら戻つて無かつた・・・。

「・・・じゃあ、任せろよ。」

結局フィーラとリリアに任せることにした。

「はいよ任せな。さて、単独の戦闘なんて本当にいつぶりだひつ・・・。」

『レ大隊の隊長になつてからは誰かしら随伴してきましたからね。あなたの階級を考えると異常に少ない人数でしたが・・・。』

「上の連中が「戦果に見合わん」って言いながら無理やりよこした階級だもの。大尉以上のことばやりたくなかつたのに書類仕事が増えたのなんの・・・。なんにせよ、久々に遠慮せず殺らせてもらひつ。そろそろ索敵終わつた?」

『完了しました。アルフさんが張つた結界の中に『ヒネミー』が1
～48体、周囲に展開中。さらに『ターゲット』と思わしき反応
が北東に確認されています。』

それを聞いたフィーラは右手で剣をゆっくり引き抜き、口角を吊り
上げ、獲物を見つけた肉食獣のような表情を浮かべた。アルフは場
の空気が変化した気がした。

「数はさつきのを入れて50匹……。少々もの足りないが、これ
からの厄介事への準備運動だ……せいぜい長引かせりよ……。」

今のフイーラにファイト達と出合った時の雰囲気は一切なく、そこ
には一匹の獣がいた。

『全『ヒネミー』、行動を開始しました。こちらに接近してきます。

』

瞬間、獣が雄たけびを響かせた。

「交戦を開始する……。来るがいい虫けらども……一匹残らず滅
ぼしてくれる……。」

異世界からきた漆黒の魔獸が咆哮を上げ、戦場に踊り出した。

第五話（後書き）

フイーラのセリフが厨一臭くなつちました・・・ orz

第六話（前書き）

ぐああああああ戦闘描写が書けねええええええーー！

第六話

フロイトside

「あれ？ アルフおはよう。」

「セツトモルツセツリ同じセツフだね……。また氣絶しないでよ。
・・？」

「氣絶？ ……ツー！」

言われてトラウマ確定のあの光景を思い出す。

「ア、アルフ！ ……蜘蛛は！ ……ジユエルシードはどうなったの！ ……」

「とにかく落ち着いて。そして蜘蛛共はホラ……。」

そう言つて横を指差す。視線をそちらに移した瞬間、壯絶な光景が目に入った。黒い影が大蜘蛛の群を相手に大暴れしていた。青白い閃光で撃ち抜き、鋭い斬撃を叩き込み、強烈な蹴りを喰らわせ、蜘蛛たちは黒い影により次々とその数を減らしていった。

『現在確認できるのは『Hネリー』が8体と『ターゲット』のみです。』

「フン、つまらん……。オラア……その程度か！？」

「……フィーアー？」

自分のやつてることに関わらせないため挨拶もせずに置いてきた筈の男、フィーアがいた。

「アルフ……どうしてフィーアがここにいるの！？」

「どうやら付いてきたみたいでさ……。アタシの結界もアッサリこじ開けて、しかもコイツらをどうにかしてやるつていうから任せた……。」

「なんで…？」

「だつてフロイト起きないんだもん……。」

「・・・」めん。て、そんな場合じゅう黙こやし……コレは私たちがやらないと・・・。」

「もう、終わるみたいだよ?」

「え?」

蜘蛛はもう一匹しかいなかつた。完全にファイアに恐れをなしたようで、蜘蛛共は怖気づいたようにジリジリと威嚇しながら後退していた。

『残りは』の『HNEIII-6、14、29』と『ターゲット』のみです。』

「そんじゃ飽きたし、もう終わらせるか。」

瞬間ファイアは駆け出す。蜘蛛が迎え撃つように上へ下へ一匹、同時に飛びかかる。それにファイアは微塵も焦らず軽くジャンプし、足元を狙つてきた一匹を避けながら銃弾を叩き込み、そのまま頭上に飛びかかってきた一匹を剣で貫いた。瞬く間に一匹は霧散した。

「ハイ、ラスト。」

振り向きざまに後ろから飛びかかってきた最後の一匹に回し蹴りを喰らわせ、宙を舞つたところに銃弾を放つ。青白い閃光、リニアガンの弾丸が蜘蛛に直撃し霧散させた。

(暴れ始めてから2分たつて無いと思つよ……?)

(す、す、す……)

改めてフイーアが軍人、兵士であることを認識した瞬間だった。

『『Hネミー』の殲滅を確認、残るは『ターゲット』のみです。』

「了解。おや? 起きたのかフェイド。」

フイーアはいつに気づいて近寄ってきた。

「……フイーア。なんでついてきたの?」

「俺の職業は軍人って言つたら? こういう厄介事には首突つ込まれや気がすまない体質なんだよ。」

「でも……。」

「ちょいタン」マ、本命が来るらしい……。」

『巨大な魔力反応の接近を確認、『ターゲット一』です。』

「ツー！バルディッシュユー！」

『Y e s . s i r .』

フェイントはデバイス、バルディッシュユを起動させた。アルフも戦闘態勢に入る。

「ん？ そのまま休んでいいぞ？」

「そういうわけにもいかない……これは私たちがやらなきゃいけないんだ……。」

「……しおうがねえな。ただし、無理矢理にでも手伝わせてもらひうぞ？」

「せつかくだし、手伝つてもいいのうよ。フィーラってすげー強いみたいだしさ?」

「・・・分かつた。」

アルフの言葉もあり、フィーラ達にも手伝つてもいいことにした。自分のやつてることに巻き込むのは本音を言つと躊躇つところがあるのだが、実際に先ほどのフィーラの戦闘を見るかぎり、フィーラの戦闘技術は凄まじく高く、さらにアルフの結界に侵入できるほど魔法の腕もあるので心強いものがある。そもそも、自分が気絶してる間に大蜘蛛の群を蹴散らしてもらった時点で今更な話なのかもしない・・・。ヒ、そこへフィーラが話かけてきた。

「ところでフロイト、お前らあの物騒な魔力反応物を・・・壊しにきたのか?」

「違うよーーそれにジュエルシードは無理矢理壊そつとしたら大変なことになるんだよー!?」

血相をえて答えた。下手にジュエルシードに刺激を加えて暴走させた場合、次元震が発生し世界が崩壊することもあるのだ。当然そんな真似はしない。

「それじゃあ、そのジュエルシードヒヤリの壊す以外の止め方は知つてるんだな？」

「うん。」

「じゃあ、ジュエルシードはフェイトに任すわ。リリア、『ターゲット1』の情報は？」

『分析の結果、『エネミー』が一回り巨大化しただけでしかも動きが鈍いようです。しかし、魔力反応の発生源はコイツで間違いないようです。接触まであと3分です。』

「「「うわあ・・・」」

さつきの大蜘蛛達より大きいと聞き、フェイトとアルフは顔を青くした。そんな一人に苦笑いを浮かべながらフィアは話を続ける。

「親玉とでも呼ぶか・・・。アルフ、結界を造れるなら相手の動きを縛る魔法とか使えるよな？」

「使えるけど？」

「即席の作戦だが、まずリリアが親玉が来る場所をピンポイントで特定。アルフが魔法で動きを止め、俺が親玉を“半殺し”にする。魔法とダメージの一重拘束で動けないところをフェイトにジュエルシードの封印を直接やってもらつ。それでいいか？」

ほとんど無駄がなく、お手軽な作戦だった。一人は即座に頷いた。それと同時にリリアの声が響く。

『『ターゲット1』接触まで1分きりました。アルフさん、座標イメージを思念通信：念話で送りますね。タイミングも私がお伝えします。』』

「分かったよ。」

「私は？」

「俺達の後ろで待機。万が一、拘束する前に封印担当のフェイトが攻撃されるとこまぬ。」

『みなさん、来ましたよ。アルフさん、10秒後に指定した場所に魔法を。』

「え？ どこにいるんだい？」

もう見えてもいい筈なのに親玉が一向に見当たらぬ。アルフは困惑した。

「いないじゃなく《8、7、6、…》ひょっとリリア？」

そんなアルフを余所にリリアはカウントを続けた。

《3、2、1、0！—今です！—》

「ああもう…【チョーン・バインド…】…って、ええ！

？」

リリアの合図に若干疑いと戸惑いを浮かべながらアルフは拘束用の魔法を放った。しかし、リリアに抱いた不安は即座に杞憂に終わつた。親玉は本当に現れた。“上から”…。着地地点とそのタイミングをリリアは完全に予測していた。そしてそのリリアの合図により放たれたアルフの魔法が完璧に決まつた。しかし、親玉の団体は伊達ではないらしく、無理矢理振りほどいていた。

「ヤバイ！—このままじゃ、強引に解除されちゃうよー。」

「そのために俺がスタンバイしてんだよ。」

そんな光景を尻目にフィーアは素早く、尚且つ柔らかく自分の剣を目前で振るう。すると剣が振るわれるたび光の線が引かれた。それを巧みに操り、みるみる内にフィーアは剣で光輝く魔法陣を絵描き、完成させた。そして・・・。

「・・・魔劍ヴィルガロム、魔銃モード。」

そう唱えた瞬間、フィーアの剣が黒い煙のようになつたと思つたら即座に再度集合し、形を作つた。ただ、フィーアの右手には剣ではなく、普通のよりじつくて銃身が長い黒い拳銃が握られていた。

「【バスカヴィル・ショット】ーー！」

黒い銃口から放たれたのは純粹な魔法弾。魔弾はフィーアの描いた魔法陣を通過した途端、その魔力を激増させ10倍以上のサイズに巨大化した。弾丸から砲弾になつた魔弾は、アルフの魔法にもがく親玉に無慈悲にも直撃した。凄まじい轟音をたて、爆炎が親玉を包んだ。

『『ターゲット1』の動きが停止しました。いや、ちょっと待つて下さい。『ターゲット1』の反応が消滅していきます！』

「マジで！？もしかして加減ミスった……？」

「大丈夫だよフィーア。ジュエルシード本体が現れるだけだから。」

フェイトの言葉の通り親玉の姿は消え、そこにはひっくり返った常識的サイズの蜘蛛と、光り輝く蒼い宝玉があつた。

「アレが、ジュエルシード……。（リリア、こつそりデータとつけ）。

《（ア解）》

「手伝ってくれてありがとう、フィーア。あとは私に任せで。」

「おひ。」

そう言いながらフェイトはジュエルシードに向かっていく。そして・

・・。

「ジュエルシード、封印……」

夜の大騒動はようやく終息を迎えた。

第六話（後書き）

やばいです・・・文がまとめてる気がまったくしないです・・・

第七話（前書き）

りゆつと無理やつ過わた…？

フィーラ side

ほとんど化物退治になつた魔力反応物…もといジュエルシード封印作業。その決着がつき、ようやく三人は一息ついていた。しかし、フィーラはフェイトたちと休みながらも思考にふけつっていた。

（このジュエルシードがヤバイ代物なのは解かるが、“この二人のこと”が分からん……）

このジュエルシードはロストロギアと言つて早い話、超危険物なのである。そしてこれの始末は先程の説明通りだと、フィーラ自身の見解は置いとくとして、この次元世界の警察組織である時空管理局とやらの役田らしい。百歩譲つてフェイト達が時空管理局に自主的に協力してると書うのなら、こんな幼い年齢で危険なことをするのには無理やり納得したかもしれないが……。

「ところでフロイト、それ（ジュエルシード）どうするんだ？ 時空管理局にでも届けるのか？」

「えっと、その……、それはちょっと……。」

わざわざから時空管理局の「こととなると歯切れが悪くなる」の一人。まあ、最初の方で管理局と会いたくないみたいなことを言ってたから薄々勘付いてるが、フロイト達は管理局から見たら犯罪者予備軍、もしくは犯罪者になることをしてるのかもしれない。だが、解せない。さつきからフロイトもアルフも無関係な人を極力巻き込まないようにながら立ち回ってる。そんな一人が自分自身悪いと思つてこることを重ねてやるとは思えなかつた。

「じゃあ、なんで「こんな」とじつくるんだ?」

「それも言えない……。」

話が進まねえ……。あ、そうだ(一矢之)。

「じゃあ、質問を変えるわ。時空管理局の常識は誰に教えてもらつた?」

「?・?・?母さん?とコースト。」

「(誰だコースト…が、いいか。)管理局に関わらなかつたのもフロイトの母さん?とコースト。」

「母なんだよ。それがどうかしたの…？」

「フュイト…お前、その母さんにジュエルシード（それ）探して来て言われたんだろ？」

「ツー？」

図星か…。世界の法律である時空管理局の」ととそれに反する行為を促すなんて矛盾を仕込むことは、このジュエルシードにフェイトを関わらすためのことにはならない。ということはつまり、フェイト達にそのことを教えた者も当然関係者である。そして、フェイト達は自らこんな真似はしない筈。そつからフュイトの母親が指示したと推測した。

「と、いつわけだ。」

「…・・・フィアの言つ通りだよ。私達は母さんに言われてジュエルシードを集めているんだ…。」

視界の端で、急な展開についていけずにアルフがオロオロしていたのは無視するとして…やはり、そうだったか。それにしても、こんな取り扱い要注意の危険物を集めてどうする気なんだフェイトの母親は？・・・ん？、今なんて言つた？・・・“集めている”だと…？

「ちよつと待てフロイト、集めているつてことはまさかジュエルシードってこの一個だけじゃないのか！？」

「え？ そうだよ。ジュエルシードは全部で21個あるんだよ？」

「ハア！？」

1個でもかうとうやバイトに全部で21個だと…お前、俺の貯金袋によつぽど穴空けたいらしいなオイ！！

「もへ、目的とかどうでもいいや…。一応確認するけど、とりあえずフロイトとマルフはジュエルシードを全部封印して持ち帰るんであって、暴走させて世界を滅ぼすわけじゃ無いんだな？」

「当たり前だよ…」

なら一安心だ…。フロイトの母親が何考えているのか不安だが、フロイトに集めろって言つたからにはそれなりの数が揃つまでは平気だろ…それまでに色々対策考えておくか…。だが今はとつえや…。

「俺もジュエルシード集めに協力をさせてもらひ。」

「「えー?」」

「もつ今更無関係とは言わせねえぞ?だいたい、自分が今いるこの世界が滅ぶ可能性があるのにそれをほつとけるわけないだろ?」

《そもそも軍人の我々が人命に関わること無視できるわけないでしょう?》

「リリアまで・・・。」

「フヒイト、フイーアたちに手伝つてもらひてこんなことわざと終わらせようよ。」

ほんの少し考えたが結局・・・。

「分かつた…。改めてよろしくフイーア。そして、ありがとウ…。」

「なに、礼には及ばないさ。アルフもよろしくな。」

「ああ……よろしく頼むよフイーア!!」

・・・・こうして三人は、しばらく行動を共にすることが決まった。だが三人はまだ知らない。この出会いがその後大きな波乱を呼ぶことを・・・。

「オマケ」

「ところでフイーア、アンタずっとその格好なのかい？」

アルフはそのままだが、フェイトはバリアジャケットを解除して私服になっている。しかし、フイーアはこっちに来た時と同様、黒い軍服のままである。

『この世界の常識の検索結果から考へると、今のフイーアの格好はイタイ人です。』

「それはイヤだな…。よし、【服装換装】。」

『了解』

するとフイーアの軍服がその形を変え始めた。帽子と上着は一体化

してフード付ジャンパーに、ズボンはジーパンになり今風の服装に変わっていた。フェイトとアルフは呆然としていた。なぜならフェイトのバリアジャケットのように魔力を一切感じなかつたのである。つまり・・・。

「フィーア…もしかして今の魔法使つてないの…？」

「ん？これうち（連邦）の科学技術。」

『こんな的一般市民でも持つてますよっ』

「す、すごいんだねフィーアの世界って・・・。」

魔法を使わず魔法染みたことをするフィーアの世界にただ驚愕するしかない一人であった。

第七話（後書き）

「」感想、「」指摘お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0721x/>

漂流者はハイブリッドな現役将校

2011年10月9日16時47分発行